

経済・人口思想家ヒュームとカンティヨン(Ⅲ)

別 府 芳 雄

Ⅰ. ヒュームとカンティヨンの人口思想

われわれは人口思想というとき、ロバート・マルサスを想起する。マルサスが“近代的人口思想の白眉”であること、“経済的人口原理の創始者”であることを知らぬ人はない。もちろん、マルサスがはじめて「人口原理」について完全な“叙述的研究”をしたからであり、人口理論は「彼（マルサス）の名声と切り離せない（An sie vor allem knüpft sich sein Ruhm）」¹⁾ 関係にあるからである。人口理論とマルサスの名声が結び合わさっているのは、マルサスが人口について、「その問題の立て方と終生にわたる研究の続行とは、かれの主著『人口論』 *An Essay on the Principle of Population*, 1st ed. (London 1798). 6th ed. 2 vols. (London 1826) をして、人口論史上きわだった地位を賦与せしめたばかりでなく、後代に対する影響力においては、まさにマーシャル Alfred Marshall の評言のごとく、“本問題に関するあらゆる近代的思索の出発点”²⁾ たらしめた³⁾ からであるといえよう。

しかし、そうはいっても——「マルサスが人口問題に関心をもった最初の人物だったわけではない。人口問題は何世紀もの間、政治経済上の論議で“よく論ぜられた題目” (a favorite topic) の一つ³⁾」であった。しばしば好んで論ぜられた話題でもあった。この点はマルサス自身の口から述べられているくらいでさえある。

ところで、筆者は小論(I)において、1766年1月13日、ヒューム（当時56才）がルソー（Rousseau）を伴って帰国したことを述べた。また、ヒュームとルソーの交友が、ルソーの猜疑心のため、不幸な確執を生んでいったことも述べた。

1766年3月9日のことであるが——ヒュームとルソーが連立って、マルサス家（ルッカリー荘 The Rookery）を訪れて、生後わずか3週間だったマルサスに知的天稟（intellectual gifts）を授けた話を——ヒュームとカンティヨンの人口思想を対比して述べるに当って——まず述べておきたい。

マルサスの父、ダニエル・マルサス（Daniel Malthus）は、オックスフォードのクイーンズ・カレッジ（Queen's College）に学んで、ささやかなれどイギリスの一郷紳（a small English country gentleman）として地方で生涯を過した紳士であったが——そのダニエルは、「ルソーとコンドルセ（Condorcet）の見解の若干の点に非常な愛着をもっていたイギリスの政治思想家である ウィリアム・ゴドウィンの弟子（disciple de Godwin）」⁴⁾であり——のみならず、ヒュームの友人でもあった。また「ルソーの熱烈な——とまではいかなくとも——心からの賛美者（devoted admirer）であった。ルソーが初めてイギリスに来たとき、ヒュームは彼〔ルソー〕を、サリー（Surrey）で、ダニエル・マルサスのすぐ近くに落ちつかせようと力をつくした。ダニエルならば、“ルソーのいっさいの世話をしたいと望んでいて——”，気の合った交際仲間をあてがい、あたたかく彼〔ルソー〕を見守るだろうと思われたからである。ヒュームが、その落着きのない訪問客（uneasy visitant）〔ルソーのこと〕に善意をもってした大概の事柄と同様に、この計画はつぶれた（the project broke down）。後年、ファニー・バーニー（Fanny Burney）がジャンジャックの隠れ家（l'asile de Jean-Jacques）として見せられたというリース・ヒル（Leith Hill）の麓にある小宅は、ルソーがそこに住まったことは一度もな

い⁵⁾」そうである。それはともかく——1759年に「ダニエル・マルサス〔マルサスの父親〕は、“角岩門農場 (Chert-gate Farm)* という名前で知られた”, ドーキング (Dorking) 近辺の“小さな雅致に富んだ邸宅” (small elegant mansion) を購入した。そして、美観や、丘と谷や、森と川などを生かして、これらすべてが飾り気のない簡素さで目に立つようにし、これを紳士の屋敷に改装して、名前も山鴉荘 (The Rookery ルッカーリー荘) とつけた。

* 角岩チャートとは、微晶質石英からなる、ほとんど純粋な硅質岩のこと。

ここで、1766年2月13日に、彼の次子であるトーマス・ロバート・マルサスが生れた。これが『人口原理』の著者である。赤ん坊が3週間になった1766年3月9日に、妖精の代母（Godmother 名親）ともいふべきジャン・ジャック・ルソーとデイヴィッド・ヒュームの両人がうち連れてルッカリー荘を訪れたが、そのさい、この幼児にキスして、さまざまな知的天稟（diverse intellectual gifts）を賦与した」と推察されるとケインズは解説しているが、これがヒュームとマルサスの最初の出会であった。

ヒュームのルソーに対する好意が、ルソーの猜疑心のため、不幸な訣別となってしまうことは、すでに述べたが、当時のルソーの精神状況は確かに異常だったようで——『エミール』（L'Emile 1762）の出版が高等法院（le Parlement）の忌諱（きい）にふれて、1762年6月9日夜半に逮捕命令が出る。——しかし、この『エミール』こそは大哲学者カントをして“深く感動させた”書物であったのだが——生れ故郷のスイスもルソーを容（い）れなかったので、ルソーはプロシア王の管轄領土内で18ヶ月も暮すことになる。つまり、フリードリヒ大王がルソーを憐んで、現在の北フランス海岸近くのモティエール（Motiers）に住まわせたが、モティエール村民が“彼を殺害しようとした”ため、パリに逃がれてくる。ルソーがパリに来たのは、ヒュームの招きに誘われて、イギリスにわたるためだった。

1766年1月13日、ロンドンに到着して、ウットン (wotton) の別荘に身を落ちつける。ところが僅か2ヶ月もたたぬうちに、ヒュームと不和になってしまう。

それは——イギリスの冷たく暗い風土が、当時のルソーの病的にまで敏感な神経をいらだたせたことも確かであったろう。それにまた例によって、物を書くことが、彼を狂暴に駆り立てたのかも知れないけれども——「“狂人にちかい” ジャン・ジャックの感性は、そのあまりの敏感なために、一種の分裂を呈している。むしろ混合といったほうがいいかも知れない。彼がおのれのうちに発見する、この感性のアマルガムは、しぜん、彼を無分別と矛盾に陥れる。彼〔ルソー〕の体質のなかにある種々異った要素が、彼〔ルソー〕の行為や長所や短所と反撥⁷⁾したためだったらしい。だから、僅か2ヶ月で、ルソーとヒュームは訣別することになってしまう。ルソーの「敏感な感受性 (sensibilité délicate) は悪意のこもった迫害 (persécution maligne)⁸⁾」を素速く感じとって見逃がさないところがあったようだが、ソーニエ (Saulnier) は、「1762年以来、ルソーは“哲学者たち”〔ヴォルテール派や百科全書派〕から悪夢 (le cauchemar) のようにきらわれていた……とくにルソーとヒュームの不和 (la brouille de Rousseau et de Hume) については、世論は、よく理解もしないで、湧き立⁹⁾った」のだと解説している。またルソーは、“虚栄心以外のいかなる原理をももっていなかった” (He entertained no principle, but vanity) (バーク) のだ、とも評されるが、当時のルソーの言動からみて——ルソーが、“強烈な精神病質傾向” (starke psychopathische Züge)¹⁰⁾をもっていたことも、——どうも確からしい。

ところで、肝心のヒュームがルソーをどう評価したか——ということだが、2人〔ヒュームとルソー〕の親交が決裂したあとでも、ヒュームは次のように述べている。「彼 (ルソー) は、人生の全過程において、ただ感じつづけた (only felt) だけであり、この点で彼の感受性 (sensitivity)

は、わたしがこれまで、その前例を見ないほどに強烈である。しかし、その感受性は、今なお彼に快樂よりは苦痛の感情 (feeling of pain than of pleasure) をより尖鋭に与えている。彼は、その衣服ばかりでなく、皮膚までも剥ぎとられ、そのまま荒々しく騒々しい風雨と闘うべく放り出された人間に似ている¹¹⁾」と。

これは、やはりヒュームならではの——“思いやりのある要約”といえよう。

ところで、前述したように「マルサスが人口問題に関心をもった最初の人物だったわけではない」——とすると、マルサスの理論が人口理論の歴史のうえで、いかなる地位を占めるものか——という点が問題になる。この点について南亮三郎博士は——「由来（ゆらい）多くの人口学史研究家は、いわゆるマルサスの“先駆”について語るを慣（ならい）とした。それによると、マルサスと同時代に、マルサス直前に、またマルサスよりも遙か以前に、ほぼ同一の、或は全く同一の思想を発表した幾多の人口論者が存在していた。その最も著名な人物として学史研究家のしばしば語るのは、イギリスにあっては——カンティヨン (Richard Cantillon ?~1734), ヒューム (David Hume 1711~1776), ウオレス (Robert Wallace 1697~1771)* スチュアート (Sir James Steuart 1712~1780) およびタウンゼンド (Rev. Joseph Townsend 1739~1816)¹²⁾」であると述べておられる。とすると——ここでも、カンティヨンとヒュームが人口思想上において、マルサスの先駆的人物として顔を出している。

*スコットランドの牧師・思想家たる R. Wallace の日本名についてウオレスと書く人（たとえば南亮三郎先生）、ウオーレスと書く人（たとえば田中敏弘氏）、ウオレスがよい、といわれる人（たとえば田村秀夫先生、また岩波人名辞典も Wallace はウオレスとしている）があるが——小論ではウオレスと統一して記述することにする。

話の順序として、まずカンティヨンについて、述べ足りなかった点を補足しておく——カンティヨンについては、小論(I)および(II)で簡単に触れておいたが——シュムペーターは「彼の生れた年は確かではない (the date of his birth is uncertain) が——ふつう 1680 年とされている¹³⁾」と書いているが、小林昇氏編の『講座・経済学史』I. 「経済学の黎明」(昭和 52 年刊・同文館)では、ハッキリとカンティヨン (1679 ~ 1734) と明記してあるので——恐らくは、その後の調査研究で明らかになったものであろう——カンティヨン (1679 ~ 1734) としておく¹⁴⁾。

なお、カンティヨンの殺害状況については——「“お休みなさい”と家人にあいさつして、いつものように書物をかかえて寝室に入った富裕な銀行家、しかも類いまれな思想家カンティヨンは、その夜のうちに、なぐり殺され、放火されて、翌朝はただ白骨だけが燃え残りのなかに見出されたのである。『商業本質論』の原稿だけが、どうして生き残りえたかは不思議といわざるをえない」——「誰れか、この伝記に記(しる)されたカンティヨンの最後の日の記事を繙(ひもと)いて、心の動揺を感じざるものがある¹⁵⁾か」——と南博士は切々と述べておられる。

このカンティヨンの人口理論は、ジェヴォンズをして、“かのマルサスの人口理論のほとんど完全な先駆をなす” (an almost complete anticipation of the Malthusian theory of population)¹⁶⁾ といわしめたくらい、すぐれたものであった。

ジェヴォンズは——カンティヨンの人口にかんする「この章こそは、もっぱら、かのマルサスの有名な人口論をば、“あらかじめ、27 頁に^〇圧縮^〇したもの (condensed by anticipation into twenty-seven pages) に^〇ほかな^〇らない。” しかるに私のみるところでは、かのマルサスは、かつてこの本『商業本質論』のこと」を読んだこともなく、またおそらく、この本について何も知らなかったであろう……付言しておくべきことは、カンティヨンは人口を論ずるにあたり、ハレー (Halley)、ペティ (Petty)、ダヴィナ

ント（D'Avenant）、キング（King）（すべてイギリスの権威）の計算・統計を引用していることである¹⁷⁾」とさえ述べている。

周知のように、ジェヴォンズは、1882年8月13日、Galley Hillの海辺で水浴中——僅か46才の若さで——不慮の死を遂げたすぐれた経済学者であったが、「ジェヴォンズの隠れた功績の一つに埋れた貴重文献の発掘がある。彼の数少ない道楽の一つは古本獃りであったが、それは高価な稀見書の蒐集ではなく、主に安物ばかりであった。しかしこれを通じて貴重な発見をなし得た事例は甚だ多く、特にリチャード・カンティヨンの発見は経済学史上不巧の功績であった。1881年1月 Contemporary Review に現われた彼の論文 Richard Cantillon and the Nationality of Political Economy は、埋れたこの大著作家が最初の総合的経済理論家であったことを明らかにし、経済学の発祥地はどこかの疑問に大きな光を投じた¹⁸⁾」ものであった。南先生は「カンティヨンの『商業本質論』は初版（フランス語）の直後、イギリスおよびフランスに幾通りもの複製版があらわれ、1767年にはイタリア訳版が出て、思想界に与えた影響は少くない。この著作をフィジオクラートおよび古典学派の思想の芽ばえの形態として、いな真実に“国民経済学のゆりかご”として推称し、著者カンティヨンの存在を学界に伝えたのはジェヴォンズの功績である¹⁹⁾」と述べておられる。

シュムペーターが——このジェヴォンズの評価は「誇張しすぎている（Jevons' estimate fails by overstatement）」²⁰⁾と述べたくらいの賞讃ではあったが——惜しいことに、人口思想についてだけいえば——カンティヨンには“人口原理”としての“増殖原理”の洞察が欠けている。——惜しいことに、マルサス的な“増殖原理”の洞察がない。カンティヨンは、みごとに“均衡”思想を説いたが——本質的には、それ以上に出ていなかった——のであり、これはカンティヨンにあっては“増殖”がいまだ現実の力として、つまり“原理”として認識されていなかったからである。いいかえれば「マルサス的な規制原理は18世紀初頭のカンティヨンにいたって、

素晴らしい発達をとげた。けれども、このカンティオンにおいては——惜しいことに、マルサスのな“増殖原理”の洞察が欠けている。尤（もっとも）、カンティオンは“納屋の鼠”（mice in a barn）の例をもって人口増殖のはげしさを説明した。しかし、この人口が、“不断に生存資料を超えて増殖する傾向ある”こと——一言にして——生きたる現実の力としての人口の認識はカンティオンには見られない²¹⁾」（新カナ使いに改む。以下同じ）のである。たとえば——カンティオンのいう「それなのに一度び凶作が訪づれるなら、かかる不慮（contingencies）にそなえて皇帝が米穀の貯蔵を配慮しているにも拘らず、彼らは幾千となく餓死する。（they starve in thousands）されば住民がシナのように多数となるなら、彼らは必然に、彼らの生存資料（Means of Living）に比例せしめられ、そして、その国が彼らの生活程度に応じて扶養しうる員数を超えることはない（they do not exceed the number the Country can support according to their standard of life)²²⁾」——でわかるとように、“均衡”が生存資料の側からではなく、人口の側から攪乱されるという考えは、カンティオンの意識にのぼっていない。いいかえると、“納屋の鼠”のごとく（like mice in a barn）繁殖しうるという人口はここでは、それ自身で何の力をも持たないものとみなされているのである。

ひとたび均衡をきたしたら、そのまま、そこで留まっているのでなしに、その作用を不断に必要とする考え方がなければならない。この認識によって、はじめて“均衡”が人口原理となりうるものなのである。ところが、カンティオンのばあいには、「動きのない、静止的な均衡のすがたをしか人口に見ることができなかったのである。均衡が中心思想をなすかぎり、人口はただ消極面において、すなわち生存資料に左右される被規制者たる面においてあらわれるにすぎない。思想史的にみれば、いまやこの人口の被規制者たる一面は、他方における積極面と、すなわち人口それ自体の内発的な力によって、かような規制に抗するものとしての積極面と結びつけ

られねばならない。人口における2つの面のかような結びつきによって、はじめてここに“均衡”および“均衡破壊”の必然性と反復性とが帰せしめられる²³⁾ものだからである。

ではヒュームの人口思想と対比してみたばあい、どう相違しているのか。

ヒュームの人口思想については、マルサス自身——謙虚にも——「私の挙示しようとする最重要な議論はたしかに新奇ではない。議論の拠つて立つ諸原理は部分的にヒュームによって説明されている²⁴⁾」と述懐している。

だから人口原理は、部分的にはヒュームが説明している。しかしヒュームは——惜しいことに——“均衡”をもたらず“妨げ”の様式を論じているのみである。“均衡”をもたらず“妨げ”の性質および種類については、モンテスキュー、ヒューム、ウオレスらによって深化されつつ論ぜられてきている。だからヒュームの人口思想のなかにあるのは人口原理の部分的説明だけである。つまり、マルサスにいたって、はじめて「“増殖”思想と“均衡”思想とが、初めて緊密な内的関連においてとらえられたことである。“増殖”思想と“均衡”思想とは、ここで初めて相互に関連し合った“増殖原理”および“規制原理”²⁵⁾となりえた」といえよう。

この点については、のちに、それぞれⅢ「ヒュームの人口思想」Ⅳ「カンティヨンの人口思想」の節で述べることにする。

さて、ヒュームの人口思想を述べるに当たって、ヒューム対ウオレスの“人口論争”について述べておく必要がある。

Ⅱ. ヒューム対ウオレスの人口論争

親しき友であり、のちに論敵となったヒューム (D.Hume) とウオレス (R.Wallace 1697~1771)——の“古代社会の人口稠密にかんする論争”について——ヒュームの人口思想を述べる前に、簡単に触れておく必要が

ある。

もともと17世紀以前の世界の人口事情はよくわからないものとされている。だからヒュームにしてもウオレスにしても「人口統計らしいものすら十分もたなかった当時の世界人口と、これまた全くどのような正反対の解釈さえも許容しうるほど漠然としていた古代の人口数を比較しようとする、初めからほとんど効果のないことがわかっているような方法に、非常な精力が費され²⁶⁾」ることになってしまった。シュムペーターのいうように「17・18両世紀の著作家たちは統計的事実を全く知らないで (in ignorance of statistical facts)、人口について理論化を行った。局部的な観察から確定的な結果 (definite results) が得られた稀な場合を除くと、彼らが依據せねばならなかったものは、ことごとく信頼しえない徴候 (untrustworthy indications) や漠然たる印象 (vague impressions) にほかならなかった。だから例えば、イギリスの人口は、1650年と1750年との間の1世紀間に、はたして増加したのか、または、減少したのかといった問題についてさえ、イギリスの著作家たちの意見が分れるというようなこともありえたのである。したがって、かかる雲霧を払いのけるために企てられた研究や、その結果生れた論争は、一風変った型の理論 (a peculiar type of theory) の見本²⁷⁾」とならざるをえない。この“ヒューム対ウオレスの人口論争”も“一風変った型の理論”の争いであった。

この点、さすがにヒューム自身は、ハッキリ自覚していたらしく“近代国家の人口稠密さ (the populousness of modern states) を計算するばあい——古代にかんする事実とつき合わさなければならないはずである”のに、「事実そのもの (the very facts) がすでに、確実とか完全さから、およそかけはなれたものな²⁸⁾」と断っている点は公正である。この論争は「すぐ決着がつくようなものではなかったが、社会一般が与える名声は、ウオレスよりも有名だったヒュームに帰せられ、ウオレスの方は一般に輕視せられるにいたった²⁹⁾」から、論争はヒュームの勝利といえよう。

もともと、この論争は——シュムペーターはいう——「18世紀の論争のなかでは、まず第1に、モンテスキューが、その《ペルシヤ人の手紙》（Lettres persanes, 1721）のなかで、古代世界は彼の時代の西欧の世界よりも人口はもっと夥多であった、と述べたことから始まった論争〔であった〕ことに注目したい。ヒュームは〈古代諸国民の人口について〉（『政治論集』1752年収録、Of the Populosity of Antient Nations, in Political Discourses, 1752）のなかで、これとは正反対の見解のために理由を述べているが、これはロバート・ウォレスによって、その人間の数についての論考』（Robert Wallace, Dissertation on the Number of Mankind, 1753）の附録のなかで、批判されている。彼〔ウォレス〕は、ここでモンテスキューのテーゼを支持した³⁰⁾からである。こうして、ヒューム対ウォレスの人口論争が始まった。

周知のように、——18世紀の啓蒙思想家、法学者、歴史家、政治学者、社会学者、文明批評家。モンテスキュー（Montesquieu, 1689～1755）の名声を一躍高からしめたものは、1721年に出版された『ペルシア人の手紙』であった。もともとこの作品はフランスの広汎な読者層を対象にした、フランス諸制度に対する風刺小説であった。

モンテスキューは、その『ペルシア人の手紙』（Lettres persanes）の「手紙の112」「レディからユスベクへ」（Lettre CXII. Rhédi a Usbek）のなかで「どうして世界は昔とくらべて非常に人口が少なくなったのか。どうして自然は初期の驚異的な多産性（cette prodigieuse fécondité des premiers temps）を喪失することがありえたのか。自然はすでに老年期にあり、衰弱死するのであろうか」³¹⁾「ローマ市民には1万から2万の奴隷さえも持っていたものがあり、それには別荘で働いていた奴隷を含まないで、そうだった。それに、ローマには、4～50万の市民（citoyens）が³²⁾いた」「ギリシア（La Grèce）は非常に荒廃して、〔いまでは〕、古代の住民の百分の一（la centième partie de ses anciens habitants）ももってい

³³⁾ない」「スペイン (L'Espagne) は昔、人びとが充満していたのだが、こんにちでは人の住まない田園風景を見せるばかりだ。そして、フランス (la France) もカエサル (César) が語ったあのむかしのガリア (cette ancienne Gaule) とは、較べものにならない」³⁴⁾「ポーランド (La Pologne) やヨーロッパ・トルコ (la Turquie en Europe) には、ほとんど人口がなくなった」³⁵⁾「昔の繁華な状態と比較してみると、クセルクセス (Xerxès) やダリウス (Darius) の時代に無数にいた住民の極く小部分 (une petite partie des habitants) をもっているにすぎないことがわかるであろう」³⁶⁾「エジプト (L'Egypte) も他国に劣らず人口不足である。結局、地球を、ぐるりと見わたしたところ、そこには荒廃 (délabrements) があるのみだ。ペストや饑饉 (la peste et la famine) にいためつけられたばかりという感じである」³⁷⁾「正確な計算にもとづいてわたしが発見したことは、地球上には古代そこにいた人間の 10 分の 1 (la dixième partie des hommes) もいないということだ。それについて驚くべきことは、地球は日々に人口を減少していて、それがつづくとする (si cela continue) , —いまから 10 世紀後には地表から人の影が消えうせることだ (dans dix siècles elle ne sera qu'un désert)」³⁸⁾ —などと書いた。ご覧のとおり、近代より古代の方が人口が稠密であった——というテーゼである。ウ・オ・レ・ス・は・こ・こ・で・モ・ン・テ・ス・キ・ュ・ー・の・テ・ー・ゼ・を・支・持・し・た・の・で・あ・る。こうして、ヒューム対ウオレスの人口論争が始まっていく。

岡田教授は「18 世紀の初めから半ばにかけて、まことに不可思議な人口論争が英仏両国におこった。それは当時の人口と古代の人口を比較して、どちらがより稠密であるかという論争である。そもそも議論の発端はモンテスキュー (Montesquieu 1689~1755) が《ペルシア人の手紙》(1721 年) で“現在、地球上には、辛うじてシーザー時代の人口の 10 分の 1 の住民がいるだけだということになる。驚くべきことには、地球上の人口は日々に減少していて、もしこの状態がつづくなら、10 世紀以内に地

表は無人境になると思う”と語ったことにある。

この減退人口に関するモンテスキューの思想は当時の識者の間に賛否両論をまきおこした。フランスではモンテスキューの考えを支持した代表的人物は、フェヌロン（Fénelon），ヴォーバン（Vauban），ボワギューベル（Boisguillebert）などである。ケネー（F.Quesnay 1694～1774）でさえ減退人口について語り，王国の人口は100年前の1650年に，2,400万人であったものが，1700年には1,900万人，そして18世紀の半ばには，1,600万人になってしまったと述べている。ケネーの弟子ミラボーもかれの時代の減退人口を信じた。……この論争はドウバア海峡をこえて，イギリスで，1850年代に史上で著名なヒューム〔対〕ウオレスの人口論争として開花した。モンテスキューに主張された考えは，こんどはウオレス（R.Wallace 1697～1711）によって支持され，ヒューム（D.Hume 1711～1776）は，フランスでの代表者ヴォルテールの命題を支持した。

ヒュームは，戦争や伝染病，ききんがどんなものであれ，一家を構える見込みがたてば人はそれをもつものであるから，上の災害は想像されるほど一国の人口を減退させるものではない。なぜなら人間の本能は一国の人口をたちまち回復してしまうからである。全体として，生存資料は文明の進歩とともに増大するから，人口が生存資料の水準と一致するかぎり，人口は増大をつづけるであろうと論断し，古代人口稠密論を退けた。

これに対しウオレスは，世界の人口が，かつてあったものより少いことの理由として，人口増殖を妨げる物理的原因と道徳的原因とを挙げた。そしてウオレスは，前者の気候，土壌など自然的条件を意味する物理的原因より道徳的原因を重視した。道徳的原因として，かれは，宗教的独身，次三男の結婚を遅らせる長子相続制，近代社会に普及した多数の貧民，商工業の発展と農村の古い慣習の衰微，奢侈の発展を列挙している。これらの理由から減退人口論の立場にたったウオレスは，増加人口の必要を強く説いている。

このように18世紀の半ばヨーロッパの知識界は、真二つにわかれて人口の増減をめぐり激しい論争を展開した。

このような思想の対立の原因としては、英仏の社会哲学者が科学的であるよりはむしろ文学的・古典的教養をもったこと、さらに致命的なことは、彼らが統計的知識にまったく欠如していたことを挙げることができる³⁹⁾と解説している。ウオレスの主張は「食糧が人間の生存にとり最も必要であるという点から出発し、食糧を生産する農業の振興を強調する。これによって、生活必需品がより安価となり、結婚が容易となるので人口が増大する。そして、この場合には、人びとは質朴精神に富んでいる。

他方、これに対して、奢侈の導入は、奢侈品の使用を必要にし、このため人びとの生活が高価につき、これが結婚と家族の維持を困難にし、人口を減少させることになる⁴⁰⁾という。だが考えてみると——モンテスキューだって、人間の“驚異的な多産性” (cette prodigieuse fécondité) を論理の前提としているのだし——両者とも、人間の増殖能力強しという点では見解が一致していて、それを“阻止する妨げ”の作用が近代のほうが多いのか、少いのかを論じていることになる。だから南博士が「もともと、この論争は——古代諸国は近代諸国に比して、人口がより稠密であったか否か、換言すれば、人口は近代にいたって減じたのではないか否かを論じたもので、人間の増殖能力を強しとみる点で両者は一致しており、ただこれを阻止する妨げが古代の方が強かつたか、或は近代の方が強い点で見解を異にした⁴¹⁾」にすぎない——と述べられたのは、その点であった。たとえば、ウオレスの方は33年¹/₃で、人口は倍增すると述べ、ヒュームは30年倍加を主張するといった具合である。しかし、増殖の能力が、いかに“妨げ”られるかという点になると、両者の見解は全く違ってしまふ。すなわちウオレスは「酷暑、酷寒、土地の不良、天候の不良、黒死病(ペスト)、飢饉、地震、河海の氾濫(はんらん)などのごとく、自然より出でて人蓄の生命を滅殺するものを“物理的原因”とし、これに対して

人間の性情と罪惡より発するものを“道德的原因”とよぶ。彼の重視するものは後者⁴²⁾」であった。つまりウオレスは“道德的原因”のほうを重視した。だからウオレスは——「——とりわけ奢侈放蕩の悪作用を強調し、近代において人口の増殖が阻害されたのは、これがためであり、また古代社会において人口が近代におけるよりも密であったと思われるのは、まさに、その生活が単純質素で、しかも農業が重視されて、これに対する奨励もまた、はるかに適切におこなわれたため⁴³⁾」である。のみならず「裝飾用技術は食料を増加しないだけでなく、奢侈を促進し、“多くの有用な人びとが農業に従事するのを妨げ”〔奴隷の存在〕、食料生産を低下させ、人口を減少させる⁴⁴⁾」という。これに対してヒュームは「古代ギリシアの人口は近代人の想像するほど大きくはなかった、また大きくなりえなかったと論じ、その証拠を古代社会のどれい制度の存在⁴⁵⁾」におく。つまり“一国の人口の稠密性にかんする奴隷制度の影響”ということであるが——この奴隷制度 (slavery) の慣行については「およそ、冷静に考察する人には、人間性 (human nature) は一般に、ヨーロッパの最も専制的な政府のもとでさえ、——古代の最も繁栄した時期よりも多くの自由をたしかに享受していることが明らであろう……家内奴隷制 (domestic slavery) は、どのような市民的服従 (civil subjection) よりも残酷で、壓制的 (cruel and oppressive) ⁴⁶⁾ である」ことは容易に理解しうる。たとえば「年老いているか、役にたたないか、あるいは病気である奴隷をタイバー河中のある島 (an island of Tyber) に遺棄し、そこで餓死させるという習慣 (custom) は、ローマでは、ごくあたりまえ (pretty common) ⁴⁷⁾」のことだったし、「無用な荷厄介と思われる者を養っておくよりも、むしろどんな価格でもよいから、役立たずになった、おいぼれ奴隷 (supper-annuated slaves) を売り払ってしまうことが、大カトー (the elder CATO) の公然たる方針 (professed maxim) だったようなときに、他の人びとが、つね日頃どのようなことをおこなっていたかは、およそ想像がつく⁴⁸⁾」であらう

う。また「鎖つきの奴隷 (slaves in chains) が強制的に働かされた場所であるエルガスツラ (ergastula) すなわち土牢 (dungeons) はイタリア中どこでも、ごくありふれたもの⁴⁹⁾」だった。だから「イタリアに対して、へんぴな諸地方、ことにシリヤ (Syria) , キリキヤ (Cilicia) , カップドキヤ (Cappadocia) , 小アジア (Lesser Asia) , トラキア (Thrace) , エジプト (Egypt) から、奴隷が不断に流入したが、それにもかかわらず、イタリアの人口数は増加しなかった。また、著述家たちは、産業と農業の不断の衰退 (continual decay) をこぼしている。それでは、普通に想定されているローマの奴隷のあの極端な繁殖 (extreme fertility of the Roman slaves) は、どこに存在していたのであろうか。彼らは——増加するどころか——莫大な数の補充 (immense recruit) がなければ、もとの人口さえ維持できなかったと思われる⁵⁰⁾」くらいなのだ。

奴隷制度が少しも人口増加にプラスせず、いかに人口を破壊するものであるかが明らかであろう。だから「奴隷制の慣行 (the practice of slavery) は、古代においては非常に行きわたっていたことであつたから、どのような方策をもってしても回復できない程度に、人口を破壊してしまうものだったに違いない。以上の推論から、わたしが引出そうとする結論のすべては——奴隷制は、一般に人類の幸福にも人口数にも不利であり、雇い召使いを用いる慣行 (the practice of hired servants) によって、とって代られる方がはるかによいということである⁵¹⁾」と強調する。古代社会のどれい制度の存在は人口増加に対して——近代人の考えるほど——寄与しえなかったことがわかる、とヒュームはいい切っている。これで奴隷制度にかんするウオレスとヒュームの見解の相違も明らかであろう。

繰返していうと——ウオレスとヒュームのこの両者は、エデンバラ哲学会の会合を通じて知友であつたばかりか、学問上の諸問題についても文通し合っていた間柄でさえあつたのだが——ウオレスの主張は人口は 33 1/3 年で倍増するという増殖率を仮定しつつ、“近代”の奢侈の増大とそれに

伴う農業生産の低下が“近代”人口減少の原因であるという。

これに対して、ヒュームはウオレスの歴史的反動性を見ぬき、人口は30年毎に倍増するものとはしつつも——ウオレスの農業重視に対して、近代市民社会の生産力の担い手である商工業重視をもって答えている。だから、人間の生殖能力強しという点では両者の見解は同じく、人口増加に対する“妨げ”の要因について両者の見解はハッキリ違ってくる。ここにウオレスとヒューム人口論争の核心があった。ヒュームの結論は——“近代”人口減退論など考えられない、ということであった。

現代の時点からふり返ってみれば——ヒュームの判断の方が正当であったことは、ことさらいいうまでもなかろう。では次に、ヒュームその人の人口思想をみることにしよう。

Ⅲ．ヒュームの人口思想

「古代諸国民の人口について」（Of the Populousness of Ancient Nations）はヒュームの『政治論集』（Political Discourses. 1752）の諸論文のうちで、最も長い論文である。ここでは、ヒュームは、まず「第1には、両時代の社会状態について、われわれが知っているところから、古代には人口がもっと多かったに違いないということがいえるものかどうか——を、第2には、じっさいに古代には人口がもっと多かったのかどうかを⁵²⁾考察」することにしたいという。つまり、第(1)は、論理的に、“古代人口稠密説”が成り立ちうるか、第(2)は、実際に、そういう事実が果してあったのかどうか——を問題としてとりあげて、検討することにしたいという。

ヒュームによると「世界というこの組織は、それが含むおのおのの形態のものと同様に、幼年期（infancy）、青年期（youth）、壮年期（manhood）および老年期（old age）をもっているに違いない。そして、あらゆる動

物および植物と同様に、人間もまたこれらすべての変化にあずかるものと思われる。世界の全盛期には、人類は、心身ともに、いっそう優れた力、いっそう立派な健康、いっそう旺盛な元気、いっそう長い寿命、それにいっそう強い生殖本能と生殖力 (stronger inclination and power of generation) とをもつはずだということが⁵³⁾期待」できるであろう。

まず第1の問題〔論理的証明〕から考えてみることにしよう。いうまでもなく「一般に、温暖な気候のところは、住民の生活上の困窮がヨリ少なく、そのうえ、植物の成長がいっそう強力であることから、人口が最も稠密 (most populous) であると思われる。しかし他のすべてのことが同一であれば、最大の幸福と美德と最も賢明な諸制度があるところには、人口が最も多いのがつねであるということを期待するのは、⁵⁴⁾当然」であろう。

それでは「古代 (antiquity) には現在主張されているほど〔そんなに〕人口が多かった (so much more populous) というのは確かだろうか⁵⁵⁾」そういうことが推論できるだろうか。

確かに「古代には、現代の医学には、ほとんど知られていないいろいろの病気があげられているが、一方、現代には、古代史に全くその形跡もない新しい病気が発生し蔓延している。この点で比較すれば、現代の方がずっと不利だといえよう。そのほか、これほど重要でないものについてはいうまでもない。あの天然痘 (small-pox) は、それだけで古代に帰せられる〈人口数の〉大きな優越を説明してしまいかねないほどの猛威をふるっている。世代ごとに人類の $\frac{1}{10}$ ないし $\frac{1}{2}$ が死ぬとすれば、人口数のうえで、きわめて大きいひらき (vast difference) を生み出すはずだと考えられる。だから、いまいたるところにひろまっている新しい疫病である性病 (venereal distempers) といっしょになれば、天然痘は、それが持続的に作用することから、人類の3大天刑である戦争 (war)、ペスト (pestilence)、飢饉 (famine) におそらく匹敵するであろう。したがって、古代の方が現代よりも人口が多く、しかも、社会的諸原因がこのような大変化をおこした

ものではないことが確かであるならば——多くの人びとの意見では、以上の物理的原因（physical causes）だけが、この点について十分満足な説明を与えるということになるであろう⁵⁶⁾」が、——物理的原因以外に注目してみると、——「男女のいずれにも、すべての人間には、いま一般におこなわれているよりも強力な生殖欲と生殖力（desire and power of generation）とがあるので、それに対する妨げとなっているものは、生活状態におけるいろいろな困難から生ずるに違いない⁵⁷⁾」のだし、「家族を維持すると思う男子は、たいてい家庭（世帯）をもつものであるが、——もしこの比率で繁殖する場合には、人類は各世代ごとに2倍以上になるであろう。（the human species, at this rate of propagation, would more than double every generation）植民地（colony）や新しい開拓地（new settlement）では、どこでも、人類はきわめて急速に増加している。なぜなら、そこでは、家族を養うのは、たやすいことであり、また人びとは、確立されてから久しい政府のもとにあるような困難や制限をけっして受けることがないから⁵⁸⁾」である。これまで「1国民の1/2ないし1/4をなぎ倒してしまったような疫病（plagues）がしばしばあったことを、歴史は教えてくれている。しかし1世代ないし2世代たつうちには、その人口の破滅は目立たなくなり、この社会は再び以前の人口を獲得したのであった。耕作された土地、建設された住宅、生産された財貨、獲得された富は、生きのびた人びとがただちに結婚して家族を養うことを可能にし、そしてこの家族が、亡くなった人びとの分を埋め合わせる「ようにしたもの」であった。また、同様な理由で、賢明、公正、寛大な政府は、すべて、その臣民の生活状態（the condition of its subjects）を安楽かつ安全なものにすることによって、財貨と富だけでなく、人口をも最も豊富にもつのが常である⁵⁹⁾」と考えられる。だから論理として、古代の方がより人口が稠密であったと推論することはできない。つまり、第(1)として、論理的に——“古代人口稠密説”は成り立たないということがわかる。

では第(2)の点、——実際にそういう事実「古代人口の稠密という事実」が果してあったのかどうかを検討してみよう。事実として“古代と近代との人口の稠密さ” (the populousness of ancient and modern times) を比較するに当って、両時代の家内状況 (domestic situation) と政治的状況 (political situation) を比較することが好都合であろう。つまり「人口の稠密性について、古代諸国民がどのような不利益のもとにおかれ、また、彼らが、その政治原理と政治制度 (political maxim and institution) から、どのような抑圧 (checks) を受けたか⁶⁰⁾」を比較考察すれば、わかり易いであろう。

第1に、「古代共和国 (the ancient republics) は、その好戦的な精神 (martial spirit)、自由の愛好、相互の競争心 (mutual emulation)、および、すぐ近隣に住む諸国民間に、ごくひろく行きわたっているあの憎悪 (hatred) の当然の結果として、ほとんど絶えまなく戦争 (almost in perpetual war) をしていたといえることができる。ところで、小国内での戦争は、大国内でのそれよりも、はるかに破壊的である。なぜなら、前者の場合には、すべての住民が軍務につかねばならないからであり、また国全体が辺境となり、国のすべてが敵の侵襲 (the inroads of the enemy) にさらされるからである。

古代の戦争の原理 (the maxims of ancient war) は、近代のそれより、はるかに破壊的であった。それは、主として、兵士たちが略奪品の分配 (distribution of plunder) に専念した⁶¹⁾からである。また「古代史においては、——貴族であろうが庶民であろうが——一つの党派 (one party) が支配的となった場合、彼らが、その手に捕えた反対党の者 (the opposite party) をすべて即座に虐殺 (immediately butchered) し、幸いに彼らの憤怒 (fury) をまぬがれた者はこれを追放したというようなことを、われわれはいつもみることができる。そこには、訴訟手続の形式も、法律も、裁判も、情状酌量もなに一つとしてない (No form of process,

no law, no trial, no pardon)。都市の $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{3}$, おそらくは半ば近くの人びとが、革命のたびごとに惨殺されたり、追放されたりした⁶²⁾のだ。「10,000人以上の同胞市民 (fellow-citizens) を平然と惨殺したと推測されている大ディオニシウス (Dionysius) や、彼よりもさらにもっと残虐なアガトクレス (Agathocles) やナービス (Nabis) や、その他の者についてはいうまでもないが——自由な国家においてさえ——その処置 (transactions) は極度に狂暴で破壊的 (extremely violent and destructive) なものであった。アテネ (Athens) で、30人僭主 (the thirty tyrants) と貴族たち (the nobles) は、12ヶ月のあいだに、裁判もせずに約1,200人を虐殺し、生き残った市民の半ば以上を追放 (banish) した。アルゴス (Argos) では、これとほぼ同時に、人民が1,200人の貴族を殺し、そのあとでは、彼ら自身の煽動者 (demagogues) を殺ろしてしまった。なぜなら、煽動者がそれ以上告発することを拒んだからである。コルキュラ (Corcyra) でも、人民は1,500人の貴族を殺りく (killed) し、1,000人を追放した。われわれが、これらの国が、ごく小さいことを考慮するとすれば——こうした数がいっそう驚くべきものだ、ということがわかるであろう。しかし古代史の全体は、このような例で満 (み) ちている⁶³⁾」のである。総じて、古代の政治原理は“人間性”に乏しく、したがって、ある時期におこなわれた暴虐行為に対して、いちいち理由づけの必要がないくらいである。さらにまた、人類の幸福と人口増加について、どう考えても——「古代諸国民の方が近代諸国民より劣ると思われる多くの事情がほかにある。交易 (trade), 製造業 (maufactures), 産業活動 (industry) は、現在のヨーロッパほど隆盛 (so flourishing) であったところは、昔はどこにもなかった。古代諸国民の唯一の衣料 (garb) 〔服装〕は、男も女も、一種のフランネル (a kind of flannel) であったと思われ、それを彼らは、普通、白か灰色にして着用し、汚れるとそのつど何度も洗濯 (scoured)⁶⁴⁾した」ものであった。つまり、産業活動が古代では未発達で住民の生活環

境も近代より非衛生的であったと思われる。

さらに、高率の利子と高率の交易利潤とは、商工業がまだ揺籃期にあることを示す——ものであるが、「ローマ帝国の確立後、ローマでは、なるほど利子率が低落した。しかしそれは、近代の商業国家 (the commercial states) ⁶⁵⁾ におけるほどの低さに、相当な期間留まることは決してなかった」のである。「農業が民衆の生存 (the subsistence of multitudes) に主に必要な種類の産業であり、したがって、この産業が、製造業と他の諸技術とが知られずに軽視されている場合でさえ、栄えるのは可能だということを、わたくしは認める。現在ではスイス (Switzerland) が一つの顕著な例である。というのは、ここにわれわれは、ヨーロッパで出合いうる最も熟練した農民 (most skilful husbandmen) と、最も不手際な商工業者 (most bungling tradesmen) とを同時に見出すからである。ギリシア (Greece) とイタリア (Italy) とにおいて、少くともそれらの若干の地方においては、ある期間にわたって、農業が栄えたということを想定できる理由がある。だから各家庭が生計をたてるために、それ自身のわずかな畑を最大の注意と勤労とをもって耕作せざるをえなかったところの、古代共和国 (the ancient republics) における富の大きな平等をとくに考慮すれば、機械的技術 (mechanical arts) が〈農業と〉同程度の発達段階に達していたかどうかは、それほど意義のあることではないと考えられるかも知れない。

しかし、農業は、ある場合には交易 (trade) や製造業 (manufactures) がなくても栄えるから、面積がいかに大きな国でも、またどのような長期にわたっても (for any great tract of time), 農業がそれだけで存立するものであると結論するのは、正しい推論 (just reasoning) であろうか？

農業を奨励する最も自然な方法は、疑いもなく、まず他の種類の産業を振興し、それによって耕作者に、彼の生産した財貨にたいして、すぐにでも売れる市場 (ready market) を提供し、そして、彼の快樂や享樂に役立

つような財の見返り品 (return) を与えるということである。この方法は絶対に確実 (infallible) で、しかも普遍的なものである。そして、それは古代の統治よりも近代の統治においてヨリいきわたっているから——そのことからわれわれは近代人口の優越 (the superior populousness) を推定⁶⁶⁾することができる」のである。「近代のわれわれの諸々の改善と洗練 (improvements and refinements) ——これらは人間の生活を容易にし、その結果、人間の増殖と増加 (propagation and encrease) とになんら貢献しなかったであろうか？ 機械的技術におけるわれわれの優越 (our superior skill in mechanics), 新世界の発見, それによって商業が非常に拡大したこと, 郵便制度の確立 (the establishment of posts), および為替手形の使用 (the use of bills of exchange), これらはすべて技術と産業活動と人口 (arts, industry and populousness) とを発達・増加させるのに、きわめて有用なことだと思われる。もしわれわれが、これらのものを取り除くならば——われわれはあらゆる種類の企業活動と労働 (business and labour) とに、どれほどの“妨げ”を加えることになるであろうか。

また、どれほど多数の家族が欠乏と飢え (want and hunger) とのために、ただちに死滅することだろうか？

だからわれわれがこうした諸々の新発明を他の何らかの調整機構や制度 (any other regulation or institution) にとって代えることができるとは、考えられないように思われる (it seems not probable)⁶⁷⁾」のだ。「古代国家の治安 (the police) が近代国家のそれに幾らかでも匹敵しうる程度のものであったとか、あるいは、当時の人びとは、家庭においても、陸路や海路による旅行中においても、現在と等しい程度の安全 (security) をえていたとか、考えるべき理由があるだろうか、——この点については、公平に検討する人なら、——すべてわれわれ近代の方に軍配をあげるだろうということ、を、わたくしは疑わない⁶⁸⁾」だから、全体として、近代人口と古代人口を比較してみたばあい「世界の人口は古代の方が近代よりも多かつ

たはずだという主張には——正当な理由を与えることは不可能と思う (*it seems impossible to assign any just reason*)⁶⁹⁾」とキッパリ言い切っている。

では、ヨーロッパの国々について、古代と近代の人口稠密度をじっさいに比較してみよう。ヒュームはいう、「古代史と近代史との舞台であるすべての地方に眼を投じ、その過去と現在との状況を比較してみることにしよう。そうすれば、現在の方が、人口が少くて荒廃 (*present emptiness and desolation*)⁷⁰⁾ しているというような苦情には根拠がないこと」がわかると思う。

たとえばドイツを取りあげて検討してみよう——「ドイツには……古代にくらべて現在、確かその 20 倍の住民がいる。このことは……平和と秩序と産業活動との風潮 (*the spirit of peace, order and industry*) をともなうのでなければ、……一国の人口を増大させないのだということの一つの証拠⁷¹⁾」とみていい。ではフランスはどうか。「当時のガリヤ (*Gaul*) に現在のフランスとほぼ同じくらいの人口がいたとは、わたくしには考えられない⁷²⁾」し、「われわれは、古代の人口稠密の原因とされている、あの財産の平等がガリア人 (*Gauls*) のあいだには、全くなかったと述べることができよう⁷³⁾」。それでは、スペインはどうか。「スペインの人口はおそらく 3 世紀前よりも減少しているであろう。しかし、もしわれわれが 2,000 年さかのぼって、その住民のあの不安定で荒れ狂った、混乱した状態 (*restless, turbulent, unsettled condition*) を考えるならば、われわれはおそらく、スペインには、現在の方が多くの人口がいる (*now much more populous*) と考えたくなるであろう。ローマ人 (*Romans*) に武器を奪われたとき、多くのスペイン人が自殺した⁷⁴⁾」ことさえある。これらの事実は、古代人口稠密論に対して、どうしても懐疑的にならざるをえないのだ。プルタコス (*Plutarch*) は、全般的な人口減少 (*the general depopulation*) がギリシア (*Greece*) において最もハッキリ感じられると述

べているけれども、ギリシアにしても——「古代ギリシアのすべての境界内に都市がほとんど一つも残っていない現在においてさえ、そこには、10倍の人口が確実にいるに違いない。この地方は、いまもなお、かなりよく耕作されており、スペイン、イタリアあるいはフランス南部に飢饉があった場合、そこへ穀物を確実に供給しているのである」——要するに、ヨーロッパのどの国をとりあげて——古代と近代の人口稠密さを比較してみても——人口は近代の方が遙かに稠密なのであり、近代人口は確実に増加している。したがって、近代人口減退論など考えられない、とヒュームは断定している。

以上みられるとおり、ヒュームの人口理論が明らかになった。しかし、人口“理論”の発展という点からいうと、「モンテスキューからヒューム、ウオレスにいたる作家系統には、〔じつは〕いまだ何程の前進もなかったように思える。ただ観察は広範となり、人口と社会的、政治的、経済的諸制度との関連は克明となってきた。一言にして人口に及ぼす“妨げ”の思想は深化した⁷⁶⁾」というべきであろう。この思想は、より後期の作家たちに、ほとんどそのまま伝承されていく。しかし“原理”としての人口理論の萌芽がすでに、ヒューム以前に存在していた。カンティヨンの人口思想が、すでに先駆的に展開されたいたのである。

では、カンティヨンの人口思想について述べよう。

Ⅳ. カンティヨンの人口思想

カンティヨンの人口思想は、カンティヨンの遺著『商業本質論』の第1篇、第15章「一国の人口の増減は、主として地主の意向、流儀、生活様式によってきまる」(*the Increase and Decrease of the Number of People in a State chiefly depend on the Taste, the Fashions, and Modes of Living of the Proprietors of Land*)のなかで、あざやかに述

べられている。すなわちカンティオンはいう「経験の示すところによれば、およそ樹木(trees)、草(plants)、その他の植物(vegetables)は、いやしくも、これにあてられたる地面の養いうるかぎりまで、これを繁殖し養っていくことができる。同じく経験の示すところによれば、およそあらゆる種類の動物 (all kind of Animal Creation) もまた、これにあてられたる地面の養いうるかぎりまで、これを繁殖し、飼養することができる〔ものなの〕である。人間がもし馬 (horses) や牛 (cattle) や羊 (sheep) のようなものを飼育するばあい——これら〔動物〕は容易に繁殖でき、そうして、ついには、これら〔動物〕たちのための土地の養いうる限度の頭数まで (to the number that the Land will support) いたりうる⁷⁷⁾」ものであると。さらにまた、われわれは「およそ、いかなる種類の動物といえども、いやしくも、これを養うべき無限の土地さえあれば (if we could find land to infinity to nourish them), これを思うままの数に——無限にすら (even to infinity) ——増殖することができるのである。そして、動物の増殖を阻むところのものは、ただひとつ、これらを養うべき手段 (means allotted for their subsistence) の多少だけである。今もし、あらゆる土地がもっぱら人間の扶養ということだけに当てられるなら、人類は——のちに述べるように——およそ土地の養いうる限度まで増加⁷⁸⁾」するであろう。「旅行記の述べているところでは、シナの人口は非常に夥多 (incredible) である。けれども、その子供の多くは、とても養うことができないので止むなく殺されてしまうのであり——ただ養いうるだけの子供だけが残される。彼ら〔シナ人〕は、きびしい辛抱づよい労働 (hard and indefatigable Labour) をもって、河川から非常に沢山の魚をとり、陸からは能う限りのあらゆるものをとってくる。それだのに一度び凶作が訪づれるなら、かかる不慮にそなえて皇帝が米穀の貯蔵を配慮しているにかかわらず (in spite of the care of the Emperor who stores Rice for such contingencies), 彼らは幾千となく餓死する。されば住民がシナのよ

うに多数となるなら、彼らは必然に、彼らの生存資料に比例せしめられ、そして、その国が彼らの生活程度に応じて扶養しうる員数を超えることはない。⁷⁹⁾」のである。「もし地主たちが人口の増加を衷心ねがうなら、もし彼らが農夫たちに生活の資を供することを約束し、そしてその目的のために彼らの土地を全部捧げることによって、農夫たちにすすめて早く結婚させ、子供を育てさせるなら、彼らは疑いもなく、人口をその土地が扶養できる点まで、すなわち彼らが一人当たり1エーカー半か、あるいは4ないし5エーカーか、そのいずれともあれ、各人にあてがった生産物に応じて増加させうるであろう。——しかるにもしこれに反し、王侯 (the Prince) または地主たち (the Proprietors) が人民を育てる (the upkeep of the People) 以外の目的に土地を使用させるなら、すなわちもし彼らが、農産物や商品に対して、市場で申し出る価格によって、農夫を人間の維持以外のために土地に使役することを決するなら（すでに述べたように、地主たちが市場へ提供する代価および彼らの消費こそは、土地の使用を決定するもので、ちょうど、彼らがみずから耕作するばあいとまったく同様だから——）、人民は必然に数を減らすであろう (the People will necessarily diminish in number)。あるものは働らき口の欠乏 (lack of employment) のために国を去ることを余儀なくされ、あるものは子供を育てる必要な資料 (necessary means of raising children) の見込みがないので結婚せず、またこれをするにしても、家計の維持のために若干の貯えをしてから、おそらく結婚〔晩婚〕するほかはなかろう (Some will only marry late, after having put aside somewhat for the support of the household)⁸⁰⁾」。

およそ「人口の増加は、人民が最も貧弱な暮しで、そして最小の土地の生産物を消費することで満足している国々においては、極端に (furthest) 実現されうる。いっさいの農夫 (the Peasant) や稼（かせ）ぎ手 (Labourers) が肉を常食とし、酒やビールを常用している国々においては、これほど多数の住民は扶養することができない⁸¹⁾」ものなのである。

「ウィリアム・ペティ郷 (Sir Wm. Petty) および、彼の次に、イギリス税関吏ダヴィナント氏 (Mr. Darvenant) は、人類がその最初の父たるアダム以来、時代の進むにつれて繁殖していったそのあとを計算しようと努(つと)めている……だが、彼らの計算は、まったく架空な (purely imaginary) もので、でたらめに、作成された (drawn up at hazard) もののように思われる。そもそも、いかにして、あのアジア、エジプトなどにおける、かつての大人口が減少 (the Decrease of those innumerable People) したことや、わがヨーロッパにおいてすら、人口の減少したことを説明しうるのであるか⁸²⁾」という。このカンティヨンの“どうして、アジア、エジプトなどにおける、かつての大人口の減少やヨーロッパでさえ、人口減少があったなどといえるのか” *how could they explain the Decrease of those innumerable People formerly found in Asia, Egypt, etc. and even in Europe?* ——という主張こそ——すでに述べたように——のちにウオレスとヒュームの人口論争において、いみじくもヒュームの立場となって、ウオレスを駁論する論拠となっていたものと思われるし、いいかえると、ヒュームに対するカンティヨンの先駆性 (または先導性) を、あざやかに示しているものと思われる。

カンティヨンはさらにいう。——「人間はもし、無制限な生存資料 (unlimited Means of Subsistence) を有するなら、納屋の鼠 (Mice in a barn) のように繁殖する。植民地においては3世代 (three generations) のうちにイングランドでなら30世代もかかるよりも比例上 (in proportion), ヨリ多数となるであろう。なぜなら植民地にあつては、彼らは耕作のために、野蛮人 (the Savages) を追い立てて、新たな一面の土地をみ出すからである⁸³⁾」と。

——ご覧のとおり、ここにカンティヨンの人口思想の特徴がハッキリ示されているのを見ることができる。南博士は「われわれは、ここに、ボテロ (Giovanni Botero) 以来、心にまつわっていた“均衡思想”が確立され

たものとい⁸⁴⁾ってよい」と確言しておられる。

だがしかし、「ここにおける“均衡”がもっぱら生存資料のがわから、いわば規制されて生ずるものであって、人口はつねに被規制者として、これに順応せざるをえないものと考えられていることを特に注意したい。人口は、一国の“扶養できる員数を越えることはない”という前掲の言葉は、それを争いなく示している。“均衡”が生存資料のがわからではなく、人口の側から乱されるという考えはカンティヨンの意識にのぼっていない。換言すれば、“納屋の鼠”のように繁殖できるという人口は、ここでは、それ自身で何の力をも持たないものとみなされている。“増殖思想”は、かくてカンティヨンにおいてさえ、なおきわめて消極的であ⁸⁵⁾った」ことが明らかである。つまり人間は“納屋のねずみのごとく” (*comme des Souris dans une grange*) 繁殖し続けるものとし、また、人間はおよそ“土地のやしないうる限りの数にまで” (*jusqu'à la concurrence du nombre que ces terres pourroient nourrir*) 繁殖し続けるものだ——としたところで、それは、生活資料からみた消極的増殖思想にすぎない。人口自体の側から、内発的な乱れ of 思想が出てくることによって、はじめて“均衡思想”の全貌が示されるものだからである。カンティヨンは生活程度の函数として人口増加をみている。〔この点は、すでに述べたシナの例をみても明らかである〕。だから、要するに「カンティヨンが、人口を支える生存資料の総量をもって、たんに王侯や地主の“趣味や気風や生活様式”によって決せられるものと見た点などは、着想において優れているとはいえ、結局、カンティヨンをして富裕な“ロンドンの一商人”として狭き視野から脱せざるをえなかったものとい⁸⁶⁾うのほかないであろう」が——ヒュームに対するカンティヨンの先駆性と、カンティヨンにいたって、初めて“均衡思想”が“王座に坐るにいたった”ことはカンティヨンの人口思想について忘るべからざる点である。

結びに代えて

以上、筆者はヒュームとカンティヨンを対比しつつ、小論（Ⅰ）においては、両者の畧伝と著作活動を述べ、小論（Ⅱ）においては、両者の経済思想を述べた。小論（Ⅲ）においてはその人口思想について詳しく述べたつもりである。結論として確認しえたことは、カンティヨンのすばらしき先駆性の功績である。

たとえば、ヒュームが1世代（30年）、人口倍増説を主張していることは、すでに述べたとおりであるが、カンティヨンも“納屋の鼠”（souris dans une grange）を例示して、人口増加の激烈なことを示している。（この点は両者とも同じ）。また古代と近代との人口稠密度の比較という点からいうと、ヒュームは“人口は古代の方が近代よりも多かったはずだという主張には——正当な理由を与えることは不可能”と主張していることは、すでに述べたとおりであるが、カンティヨンも“アジアやヨーロッパ人口が古代に比して減少したなど、どうしていえるのか”と述べて、“近代”人口減少説を退けている。（この点も同じ）。

ただヒュームの場合には、——すでに述べたように——歴史的、法制的な人口思想で、まだ、“均衡”思想が芽ばえてはおらず、部分的説明にとどまっている。

ところが、カンティヨンは、早くも、あざやかに“均衡”思想を描いている。われわれは、“均衡”思想がカンティヨンにおいて「人口理論の王座に坐る」（南先生）のをみた。

しかし——繰返し述べたように——カンティヨンの“均衡”は、むしろ静止的というべきもので、“攪乱”という発想は未だ彼の意識にのぼっていなかった。この“攪乱”という発想は、“増殖”思想の深化から——つまり、それを単なる可能性としてではなく——現実の力として把握するこ

とによって、はじめて理論的な認識となりうるものである。カンティヨンのばあいには、“均衡”は、ただ消極的で——生存資料に依存する被規制者として現われているにすぎない。この消極面は積極面（それ自体の内発的な力によって、このような規制に抗するものとしての積極面）と結びつけられねばならないものであろう。

この2つの側面の結合があつてこそ、“均衡”および、その攪乱の必然性と反復性が帰結できる。これは人口にかんする原理的な認識における一歩の大きな前進を意味する。（この前進を、のちにマルサスが果すことになる）。

しかしながら、人口思想について、筆者が、ヒュームとカンティヨンを対比してみると、この点でも、カンティヨンの先駆性を確認しうるのである。すなわち、“均衡”思想の“確立の功”は、カンティヨンであり、カンティヨンにおいて、“均衡”思想が人口理論の“王座に坐る”のをみとめることができた。たとえ——ロンドンの一商人の視野のそとに出ることはできなかったにしても——カンティヨンの著作にみられる人口思想にかんする先駆的功績は多大なものがあつた。またヒュームに与えたカンティヨンの著作の影響は無視しえないものがあることを確認しえた。

多くの分野にわたって、数多くのすぐれた著作を残したデイヴィッド・ヒュームとアイルランド出身のイギリスの一商人で、僅かに一冊の著書（『商業本質論』）しか残さなかったリチャール・カンティヨンとを対比したことについて——あるいは不満を抱かれる人もあるであろう。しかし、現在、少くとも人口学会においては、カンティヨン重視の傾向は無視しえないものがあることを付記しておく。

稿を終るにあたって、恩師南亮三郎先生からご指導とご助言を賜った。謹んで感謝の意を表する。

- 注 1) Schumpeter, *Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte*, op. cit., S. 55.
- 2) 南亮三郎「人口」(『経済学大辞典』1. 昭和30年, 東洋経済新報社, 197頁所収)
- 3) Heimann, *History of Economic Doctrines*, op. cit., p. 84.
- 4) Emile James, *Histoire sommaire de la pensée économique*, op. cit., p. 93.
- 5) Keynes, *Essays in Biography. The collected writings of John Maynard Keynes*. Vol X. Royal Economic Society, 1972, p. 74. ◦印引用者。
- 6) *ibid.*, p. 74. ◦印引用者。
- 7) 青柳瑞穂「ルソーに関する断想」(青柳訳『孤独な散歩者の夢想』新潮文庫, 昭和52年, 186頁所収)
- 8) V.-L.Saulnier. *La littérature française du siècle philosophique*, 1943, Presses universitaires de France, p. 80.
- 9) *ibid.*, p. 80.
- 10) H. Strörig, *Kleine Weltgeschichte der philosophie*, op. cit., S. 257.
- 11) B. Russell. *History of Western Philosophy*. op. cit., p.665 ~ 666. 傍点原著者, ◦印引用者。
- 12) 南亮三郎『人口原理の確立者』昭和19年, 三省堂, 233頁。
- 13) J.A.Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Eleventh printing, Oxford University Press, 1980. p. 217.
- 14) 小林昇編「経済学の黎明(講座『経済学史』同文館, 昭和52年, 125頁その他, 225頁をみよ)
- 15) 南亮三郎『人口学総論』昭和35年, 千倉書房, 81頁。
- 16) Jevons. *The Nationality of Political Economy*, op. cit., p. 347.
- 17) *ibid.*, p. 347 ~ 348. ◦印引用者。
- 18) 寺尾琢磨「ジェヴォンズ」(『経済学説全集』9. 昭和30年, 河出書

房，52頁所収）。印引用者。

- 19) 南亮三郎『人口学総論』前掲書，81頁。
- 20) Schumpeter, History of Economic Analysis, op. cit., p. 217.
- 21) 南亮三郎『人口原理の確立者』前掲書，233頁，傍点原著者，。印引用者。
- 22) R. Cantillon, Essay on the Nature of Trade in General, op. cit., p. 69. 傍点原著者。
- 23) 南亮三郎『人口思想史』昭和47年，千倉書房，142頁。
- 24) Malthus, An Essay on the Principle of Population, 1st. ed. (1798). p. 8.
- 25) 南亮三郎『人口学総論』前掲書，442頁。
- 26) 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』前掲書，139頁。
- 27) Schumpeter, History of Economic Analysis, op. cit., p. 253.
- 28) D.Hume, Of the Populousness of Ancient Nations. Writing on Economics, op. cit., p. 147. 。印引用者。
- 29) 田中敏弘，『社会科学者としてのヒューム』前掲書，138頁。
- 30) Schumpeter, History of Economic Analysis, op. cit., p. 253. 。印引用者
- 31) Montesquieu, Lettres persanes, Garnier Frères, 1975, p. 232.
- 32) ibid., p. 233.
- 33) ibid., p. 234.
- 34) ibid., p. 234.
- 35) ibid., p. 234.
- 36) ibid., p. 234.
- 37) ibid., p. 235.
- 38) ibid., p. 235.
- 39) 岡田実「人口の歴史と人口思想」（『現代人口論』昭和50年，千倉書

房，22～23頁所収)

40) 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』前掲書，157～158頁。°
印引用者。

41) 南亮三郎『人口原理の研究』昭和18年，千倉書房，77頁，°印引用者。

42) 同書，78～79頁。

43) 同書，79頁。

44) 田中敏弘，前掲書，158頁。

45) 南亮三郎『人口思想史』前掲書，33～34頁，傍点原著者。

46) D.Hume, Writing on Economics, op. cit., p. 112.

47) ibid., p. 113.

48) ibid., p. 114.

49) ibid., p. 114.

50) ibid., p.117～118.

51) ibid., p. 124.

52) ibid., p. 111. 傍点原著者，°印引用者。

53) ibid., p. 109.

54) ibid., p. 112. °印引用者。

55) ibid., p. 110.

56) ibid., p. 110.

57) ibid., p. 111.

58) ibidp. p. 111 °印引用者。

59) ibid., p. 111～112.

60) ibid., p. 131.

61) ibid., p. 131.

62) ibid., p. 134.

63) ibid., p. 136.

- 64) *ibid.*, p. 143. ◦ 印引用者。
- 65) *ibid.*, p. 144.
- 66) *ibid.*, p. 146. ◦ 印引用者。
- 67) *ibid.*, p. 146.
- 68) *ibid.*, p. 146 ~ 7. ◦ 印引用者。
- 69) *ibid.*, p. 147. ◦ 印引用者。
- 70) *ibid.*, p. 173. ◦ 印引用者。
- 71) *ibid.*, p. 174 ~ 5. ◦ 印引用者。
- 72) *ibid.*, p. 175.
- 73) *ibid.*, p. 175 ~ 176.
- 74) *ibid.*, p. 177.
- 75) *ibid.*, p. 182.
- 76) 南亮三郎『人口学総論』前掲書, 79 頁。
- 77) R.Cantillon, *op. cit.*, p. 65 ~ 67.
- 78) *ibid.*, p. 67.
- 79) *ibid.*, p. 69. 傍点原著者。
- 80) *ibid.*, p. 73.
- 81) *ibid.*, p. 83.
- 82) *ibid.*, p. 83. ◦ 印引用者。
- 83) *ibid.*, p. 83. ◦ 印引用者。
- 84) 南亮三郎『人口学総論』前掲書, 85 頁, 傍点原著者。
- 85) 同書, 83 頁, 傍点原著者。
- 86) 同書, 87 頁。